社会科教育におけるマス・コミュニケーションの問題

（第六報告・第七報告）

石黒彰二・都築　亨・中尾正三

はしがき

ここに報告する研究は，昭和33年度文部省科学研究助成金による研究の一部である。このうち第六報告は日本教育学会第18回大会で，第七報告は日本応用心理学会第26回大会でそれぞれ発表したものである。

この研究の計画と進行について，いろいろと貴重な御示唆をいただいた重松鷹泰，続有恒両教授に対して深く感謝の意を表したい。

第六報告　中学高校生の社会的態度に及ぼす映画の影響

I　目　　的

この研究の主要なねらいは二つある。第1はある特定の意図のもとに編集された報道記録映画の観覧が，中学，高校生の社会的態度に及ぼす影響を比較検討することである。第2はこれと関連することであるが，映画の効果を短期間後と長期間後について比較検討することである。

ピータースンとサーストン（Peterson, R. C. and Thurstone, L. L., 1932）[1]は上級及び下級ハイスクールの生徒に，「4人の息子」（Four Sons）という無声映画を見せて，ドイツ人と戦争に対する態度への影響を調べた結果，映画観覧以前よりも，ドイツ人に対してより友好的になり，又戦争に対する態度もわずかに平和主義に傾いたと報告している。彼等は又反ニグロ的映画の観覧が，黒人に対する態度の悪化をもたらし，その効果は19カ月後にもかなり多く残っていたと述べている（1933）[2]。その後，映画の社会的態度に及ぼす効果の実験的研究はかなり多く，ローゼンタール（Rosenthal, S. P., 1934）[3]，ウィーズとコール（Wiese, M. J., and Cole, S. G., 1946）[4]，ローズ（Rose, A. M., 1948）[5]，ローゼン（Rosen, I. C., 1948）[6]などがそれぞれの立場から検討を加えてきた。さらにホブランド（Hovland, C. I. etal., 1949）[7]は映画の提示する合理的で妥当な主張に対しては，教育水準の高いものが影響を受けやすく，非合理的で情緒的な主張に対しては教育水準の低いものの方が影響されやすいこと，又その効果は長期間後により著しくなる傾向のあることを，実験的研究の結果に基づいて指摘している。

われわれはさきに予備的調査（第一報告，1955）[8]によって，映画「しいのみ学園」が中学から高校へ進むに従って，内容的にも異なった影響を与え，それに対する鑑賞態度も高校生の方が一そう客観的，批判的であることを明らかにした。この研究では，これまでの成果を，わが国の中学高校生を対象として，上述の二側面から一そう組織的に再吟味するとともに，とくにハンガリー事件という重要な国際問題に関する報道映画を，生徒がどう受け容れるかについて分析検討しようと考えている。

ここで用いた映画，USIS 提供の「この若き世代の怒り」「苦悶するハンガリー」の2本である。一般の報道記録映画がそうであるように，この映画はハンガリー事件に対する一つの立場を背景として編集されたものである。その立場は，自由主義ないし資本主義の擁護を前提としていると解せられる。すなわち，ハンガリー人による，ソ連の圧迫に対する自由と独立への戦いと，自由主義諸国の精神的援助の実状を描くことによって，ハンガリー人への同情と，ソ連の武力干渉に対する非難を強く人に訴えようと意図しているようである。従ってソ連の立場やハンガリーのカダルー派の社会主義者たちの立場については触れるところが少なく，その取扱いも必ずしも公平であるとは言い得ないものがある。

このような映画を，民主的な立場に立って賢明に識別し，批判的に受容しうる能力と態度を培うことは，社会科教育の一つの重要なねらいでもある。もちろん映画の受容における所属集団や文化的圧力の影響も無視できないが，どのような受容の仕方をするかについては，社会科教育の成果の一部としても当然評価さるべきものであろう。このような立場から，この結果を社会科教育の反省の資料とすること，これがこの問題

を取上げた今一つの理由でもある。

Ⅱ　方　　法

（1）実験の手続

中学2年及び高校2年各75名を，等質とみなされる*25名ずつの3群に分けて次のような手続で実施した。とくに事前調査は，被験者に対して映画観覧における特定の構えを設定させやすいので，これを除去する一つの手段として統制群Cを設けた。

	中学2年			高校2年		
	実験群(a)	統制群(b)	統制群(c)	実験群(a)	統制群(b)	統制群(c)
事前調査　(1〜3日前)	調査A・B・C	調査A・B・C	なし	調査A・B・C	調査A・B・C	なし
映画提示	提示	なし	提示	提示	なし	提示
事後調査（Ⅰ）(直後)	調査D	なし	調査D	調査D	なし	調査D
事後調査（Ⅱ）(1〜3日後)	調査A・B・C	調査A・B・C	調査A・B・C	調査A・B・C	調査A・B・C	調査A・B・C
事後調査（Ⅲ）(82日後)	調査A・B・C	調査A・B・C	調査A・B・C	調査A・B・C	調査A・B・C	調査A・B・C

調査の期日はそれぞれ，次の通りである。

イ　事前調査　3月12〜13日（昭和34年）

ロ　映画提示及び事後調査（Ⅰ）　3月14日

ハ　事後調査（Ⅱ）　3月15〜16日

ニ　事後調査（Ⅲ）　6月8〜10日

事後調査（Ⅰ）は中学高校別に，教室でなされた映画観覧の直後，その場で実施した。映画の提示に当っては，次の趣旨の教示を与えた。

「これから見せる映画は，ハンガリー事件に関する記録映画です。今まで社会科で学習してきたことと，いろいろ関係があると思いますから，それらと結びつけて考えながら見て下さい」

なおハンガリー事件に関する解説や映画の意図，製作者及びその製作の立場などの説明は一切行わなかった。またこの実験の時期は，学期末の試験が全部終った後であるため，生徒にとって，この映画観覧が課業としてよりはもっと気楽な構えで受け容れられる状況にあったということも特に忘れてならない条件であろう。

ここで用いた調査は次の通りである。（付録参照）

調査A　国民好悪調査。資本主義国家群（英・米・仏・伊）社会主義国家群（ソ連・ポーランド・ハンガリー・中華人民共和国）中立国家群（イラン・インド・エジプト＜アラブ連合共和国＞・インドネシア）の12カ国に対して一対比較法による。

調査B　ハンガリー事件に関する意見と知識の調査

調査C　人権意識テスト[9]（国際教育研究会）

調査D　映画に対する感想調査。

（2）提示材料

はじめに「苦悶するハンガリー」（1巻。所要時間11分—US. 5729）を，続いて「この若き世代の怒り」（2巻，所要時間20分—US. 5805）を提示。前者はハンガリー事件を歴史的な背景の下に描き，後者はこの事件のてんまつと世界の反響に重点を置いているが，多少重複するところもあるので，両者を一括して内容のあらましを述べることとする。

中欧で近世以降，輝かしい歴史をもつハンガリーは，第二次世界大戦のあと，ソ連軍の進駐下に，少数派である共産党が政権を握り，社会改革を強行し，又青少年の共産主義教育に力を注ぐことになった。しかし，労働者や農民の生活は，10年たっても一向楽にならず，生活への不満や政府への批判も秘密警察によって，弾圧されるという状態が続いた。ついに1956年10月23日，秘密警察の廃止と生活改善の要求をかかげてブダペストに平和なデモ行進が起る。しかし，官憲がこれに発砲して弾圧をはかったため，市民は憤激して政府を倒し，ソ連軍を市外に撃退する。戦う市民，炎上するソ連戦車，負傷者のいたましい姿，赤い星をたたき落し，ソ連の進駐を記念する銅像を打ちこわす市民たちのはればれとした顔が写し出される。この反抗の中心になって活躍したのは，共産主義教育を受けた青年や，労働者，軍人であったと映画は説明する。ナジ政権の成立，ハンガリー中立宣言，ワルシャワ条約の破棄と続いて，やがて，平和的に交渉を進めると言明したソ連軍の裏切り的なブダペスト総功撃が始まる（11月4日）。そこで市民は勇敢に戦うが，ついに敗れて，多数がオーストリアに亡命する。闇夜に，荷物ももたず，単身国境を越える人々のあわれな姿が描かれる。次いで，フランス，ヴェトナム，ウルグアイなどの諸国における，ソ連非難のデモ行進や国連における各国代表のソ連非難の演説が，世界の声として報道されている。

なおこの映画では，はじめにUSISの字幕が出るが「この映画は戦うハンガリー人自身の手によって写されたものである」とことわっている。

（3） 被　験　者

名古屋大学教育学部付属中学校及び高等学校の生徒で，各群の名大式知能検査による偏差値は表1の通りである。これについてF検定の結果，各群間に有意差は認められなかった。

表　1

群	a		b		c	
学　年	平均	S.D.	平均	S.D.	平均	S.D.
中　2	61.96	8.55	60.74	7.35	62.18	6.01
高　2	60.64	5.56	61.52	5.28	60.32	5.02

（4） 実　験　者

すべてが3名の研究者の協同によって進められた。

Ⅲ　結果と考察

（1） 映画に対する生徒の反応

はじめに，この映画を生徒がどう受け取っているかについて，調査Dの結果を，a，c両群によってみよう。

表　2　この映画で一番強く感じたところ（%）

学　年	中2		高2		χ^2検定
人　数（a群＋c群）	50		50		
イ．ハンガリー人の愛国心の強さ	34	58	18	32	△
ヘ．ソ連軍に対するハンガリー市民の抵抗の激しさ	24		14		
ハ．ハンガリー人の悲惨な生活	14	24	2	30	
ホ．弱い民族や国のみじめさ	6		24		**
チ．自由を求めて，他国に避難する人々のあわれさ	4		4		
ニ．秘密警察などを使う政府のひれつさ	2	42	4	36	
ロ．ソ連のハンガリー人に対する圧迫のひどいこと	36		18		*
ト．共産主義のおそろしさ	4		14		
リ．その他	2		6		
（2つ以上）	(24)		(4)		
合　計	126		104		

注1．1人で2つ以上記入したものがあるため，百分率の合計は100より多くなっている。

2．χ^2検定は応答項目毎に独立に行った。**は1%水準で，*は5%水準で有意差のあることを示す。また△は10%以下の水準で差のあることをあらわす。以下同じ。

一番強く感じたところ（問1）は表2に示す通り。こまかく見ると中学と高校で感銘の受けかたが多少異なるが，ハンガリー人の抵抗の積極的側面（イ，ヘ）と消極的側面（ハ，ホ，チ）及び共産主義への反ぱつとに大別してみると，両者はほぼ似た傾向である。ただ高校生は「弱い民族や国のみじめさ」「共産主義のおそろしさ」など，抽象的な表現を選ぶことが多い。これは映画の意味をより一般化して受取る態度のあらわれとみてよかろう。

次にこの映画の報道をどれほど信頼するかを問3についてみると，表3に示す通り，真実と思うものが過半数を占め，しかも中学と高校でほとんど同傾向といってよい。その理由は数量化していないが，「ほんとうと思う」というものの中にも，素朴に「あのような映画ができているのだから」というものから，一そう客観的に「新聞やラジオなどで知っていたことと一致するから」というもの，さらに批判的に「全部は描かれていない。少し誇張が強い」というものまであることは注意を要する。「わからない」という理由には，「新聞など見ないから，映画の意味がはっきりわからない」という知識の欠如を示すものもあるが，多くは「ソ連の立場が描かれていない」と「ソ連に反対し共産党を悪くいうために誇張して描いてあるから」など偏見にもとづく反共的宣伝映画と解している。「ほんとうと思わない」というものは少ないが，その理由には，やはり「反共的で，ゆがめられている」というほか，「自由主義がすべて肯定してあるのは疑問だ」と鋭く製作者の立場を追及しているもののあることが注目される。

表　3　映画の報道内容を真実と思うか（%）

学　年	中　2			高　2		
群	a	c	計	a	c	計
人　数	25	25	50	25	25	50
思　う	60	64	62	72	64	68
わからない	40	28	34	28	32	30
思わない		8	4		4	2

なお，「ほんとうと思う」ものの中に，「ソ連は太平洋戦争のときもひきょうな行為をしたから，ほんとうらしい」というように以前に形成されたプレディスポジョン（Predisposition）に基づいて映画を解釈するもののあること，又その反面「わからない」という理由として「あの映画だけでは，ソ連軍だけがあまりにも悪らつであるが，ソ連軍だっていろいろな理由があってしたことだろう。ソ連の側から写した映画もみ

たい」というように，より広く公正な立場において妥当な判断を下そうとする構えのできているもののあることなどは，社会科教育の立場からみても注目すべきことと考えられる。

次にこの映画の製作者と製作の意図について，生徒がどれほど理解しているかを，問2についてみよう。結果からみて，製作の意図は製作者あるいは編集者の認知のしかたに，かなりはっきりと反映しているようにみえるので，製作者だけについて分類集計してみると表4の通りである。映画のはじめに説明されている

表　4　この映画の製作者（%）

学　　年	中2		高2	
人　数（a群＋b群）	50		50	
ハンガリー人	70	70	50	50
世界の自由主義者	2	4	14	28
アメリカの USIS	2		6	
ハンガリー人が写し，資本主義国で編集	0		4	
アメリカの反ソ分子	0		2	
共産主義の反対者	0		2	
国際連合	4	26	2	22
政府に反対するもの	0		2	
平和を祈る人	0		2	
第三者又はハンガリー人	10		6	
わからない（無記入）	12		10	

通りハンガリー人と答えたもの，反ソ的な立場のものと解するもの，及びその他に三大別してみると，χ^2検定（2×3分割表）により1%水準で中学高校間に有意差が認められる。又反ソ的立場のものとする応答だけについても同じ水準で有意差がある。すなわち高校生の方が，製作者をより正しく認知しているといえよう。

問4の全般的な感想についても，他の質問と結びつけて，いろいろ興味のある問題が示唆されるのであるが，ここでは紙数のの関係もあるので省略する。

（2）ハンガリー事件に関する知識とその変化

この映画の中で描かれているハンガリー事件について，中学・高校生は，すでに新聞・ラジオ・テレビ・雑誌などの報道によって，かなり知識をもっていると考えられる。調査Bの問1についてみると，表5の通りである。新聞やラジオで見聞きしたことのあるもの

表　5　新聞・ラジオ・雑誌などで知っていたか。（%）

学　年	中　2				高　2			
群	a	b	c	計	a	b	c	計
ある	56	52	60	56.0	76	76	84	78.7
ない	36	40	36	37.3	24	24	16	21.3
無記入	8	8	4	6.7	0	0	0	0

は，中学より高校の方が多く，その差は1%水準（χ^2検定）で有意である。しかし両者のそれぞれの群（a・b・c）間ではほとんど差異がみられない。

そこでこれらの生徒が，ハンガリー事件とそれを理解するに必要な一般的基礎的な社会的知識をどの程度もっているか。又それが映画の観覧によってどう変化するかをみよう。

調査Bの知識問題すなわち，問1(3)及び問3(1)〜(5)の30項目（items）の成績を示すと表6の通りである。a b両群の映画観覧前の知識については，中学よりも高校の方がすぐれている（有意水準1%）。映画観覧後の影響を，提示前のa，b両群の平均とc群の平均

表　6　社会的知識

学年	群	a		b		(a＋b) 平均 (S.D.)	c		$c-\frac{1}{2}(a+b)$	交互作用 (I)
	調査時	平均	S.D.	平均	S.D.		平均	S.D.		
中2	提示前	18.06	4.10	18.30	4.86	18.18 (4.26)				
	短期間後	20.46	4.08	19.74	4.94		18.54	5.78	0.36	0.60
	長期間後	19.34	4.76	19.66	5.68		18.46	4.60	0.28	
高2	提示前	24.88	5.24	22.70	4.34	23.79 (3.78)				
	短期間後	25.56	2.73	23.68	3.66		23.90	3.20	0.11	−3.50
	長期間後	25.08	2.98	22.56	2.79		23.38	3.54	−0.41	

表 7 提示前と短期間後に対する要因分析

変動因	SS	df	MS	F
映画条件	0.38	1	0.38	0.08
学　年	288.45	1	288.45	60.00**
交互作用	0.14	1	0.14	0.03
誤　差	702.18	146	4.81	
全　体	991.15	149		

注 短期間後の学年差の検定，$F_0=18.65>F_{0.01}$

表 8 提示前と長期間後に対する要因分析

変動因	SS	df	MS	F
映画条件	0.16	1	0.16	0.04
学　年	269.79	1	269.79	61.75**
交互作用	1.02	1	1.02	0.23
誤　差	638.82	146	4.37	
全　体	909.79	149		

注 長期間後の学年差の検定，$F_0=16.48>F_{0.01}$

との関係においてみると，表6の$c-\frac{1}{2}(a+b)$にみられるように，短期間後ではわずかに上昇がみられるが，要因分析によると，映画の影響は認められず，学年差だけが有意である。又，長期間後でも同様に，表8にみる通り映画の影響は認められず学年差だけ有意となっている。

なおa群の提示前と短期間後の成績の差をD，b群のそれをD′，また$c-\frac{1}{2}(a+b)$の値をD″とするとき，事前調査と実験条件の間に存在すると考えられる交互作用の効果（Ⅰ）は，ソロモン（Solomon, R. L., 1949）[10]に従って $I=D-(D'-D'')$ の式で算出される。表6によって明らかなように，高2では交互作用が負の値を示し，しかもかなり大きい。これは事前調査が映画の観覧に対して，ある種の抵抗をうみ出したためではないかと推定される。しかしそれが何であるかについては，あらためて検討する必要があるだろう。

次にハンガリー事件に直接関係があり，映画の中でも取扱っていた事項，すなわち，問1—(3)，問3—(2)ハ，(3)d，(4)c，(5)，(6)ロの6項目（items）についてみると，表9の通りである。中学と高校でははじめに持っている知識は一般に高校の方に多いが，映画観覧後の変化は大差なく，いずれも低い向上しか示していない。1(3)のハンガリー事件の内容に関する知識だけは中・高とも向上（中学は有意差をもって）しているが，これは概括的な知識を要求しているため，よく保持されたのだろう。又3(5)のハンガリーの政治に関する知識は，この映画を見たために知識が混乱して応答に困るということもあったかもしれない。安全保障

表 9 映画で取扱っている項目の正答率（%）

問題	学年	a_1	b_1	a_1+b_1	c_2	d_1	c_3	d_2
1.(3) ハンガリー事件の内容	中 2	40	36	38	68	30*	64	26△
	高 2	44	44	44	60	16	56	12
3.(2)ハ，安全保障理事会	中 2	80	84	82	84	2	92	10
	高 2	96	96	96	100	4	96	0
3.(3)d. カダル首相	中 2	48	36	42	56	14	48	6
	高 2	64	52	58	64	6	40	−18
3.(4)c. ハンガリー史	中 2	24	32	28	32	4	28	0
	高 2	44	36	40	40	0	44	4
3.(5) ハンガリーの政治	中 2	80	72	76	76	0	72	−4
	高 2	96	80	88	88	0	76	−12
3.(6)ロ. ハンガリー事件の指導者（首相）	中 2	12	16	14	20	6	24	10
	高 2	40	28	34	36	2	36	2

注 a_1，b_1は提示前，C_2は短期間後，C_3は長期間後，またd_1は$c_2-\frac{1}{2}(a_1+b_1)$，d_2は$c_3-\frac{1}{2}(a_1+b_1)$の値をあらわす。

理事会はすでに多くの知識があるために変化が少ないのであろう。他の3項目は映画の本すじからみれば比較的こまかな事実の知識だから，あまりよく保持されなかったのかもしれない。

（3） ソ連とハンガリーに対する国民好悪の変化

この映画の観覧は，生徒のソ連国民に対する非好意的態度とハンガリー国民に対する好意的態度を強めるものと推定される。この検討のためになされた調査A*の結果は表10の通りである。

はじめに（a+b）群について映画観覧前のハンガリー国民に対する好意的態度をみると，中学・高校間に有意差がない。しかしソ連国民に対しては中学生の方が，有意差（1％水準—$F_0=9.68$）をもってより好意的となっている。この被験者は中学・高校とも同じ校舎で，同じ教師によって教育されていることを考えあわせると，ソ連国民への好悪を左右する他の決定要因が働いているように思われるが，ここにはそれを追及するだけの余裕がない。

表 10　諸国民に対する好悪

学年	国民名	群 調査時	a 平均	a S.D.	b 平均	b S.D.	(a+b) 平均 (S.D.)	c 平均	c S.D.	$c-\frac{1}{2}(a+b)$	交互作用 (I)
中2	ハンガリー	提示前	3.88	2.46	3.92	2.55	3.90 (2.50)				
		短期間後	5.08	2.26	4.56	2.30		5.72	2.41	1.82	−1.26
		長期間後	4.08	2.55	3.96	2.23		4.04	2.01	0.14	
	ソ連	提示前	6.20	3.55	6.60	3.26	6.40 (3.42)				
		短期間後	4.28	4.26	6.64	3.18		3.56	3.21	−2.84	−0.88
		長期間後	5.56	3.81	6.76	3.02		3.00	2.84	−3.40	
高2	ハンガリー	提示前	4.40	2.76	4.08	2.70	4.24 (2.46)				
		短期間後	5.86	1.99	3.80	2.53		6.44	2.10	2.20	−0.46
		長期間後	5.08	2.63	3.96	2.29		6.00	1.77	1.76	
	ソ連	提示前	3.48	2.47	5.24	3.63	4.36 (3.20)				
		短期間後	1.52	1.67	5.04	3.39		2.88	2.97	−1.48	+0.28
		長期間後	2.08	2.09	4.40	3.32		2.40	3.02	−1.96	

次に映画観覧後の効果について，まず短期間後の国民好悪における影響をみよう。表10の$c-\frac{1}{2}(a+b)$の値に示される通り，中学・高校とも予期した変化があらわれているが，その差を要因分析によって検定すると，表11及び表12となる。すなわち映画観覧後におけるハンガリー国民への好意的態度とソ連国民への非

表 11　提示前：短期間後—ハンガリー国民への好悪，要因分析

変動因	SS	df	MS	F
映画条件	134.67	1	134.67	21.86**
学年	8.18	1	8.18	1.32
交互作用	1.19	1	1.19	0.19
誤差	896.82	146	6.14	
全体	1,040.86	149		

注 1．条件（映画）差の検定 $\begin{cases}中学F_0=9.00>F_{0.01}\\高校F_0=11.51>F_{0.01}\end{cases}$

2．学年差の検定，提示前・後ともに有意差なし。

表 12　提示前：短期間後—ソ連国民への好悪，要因分析

変動因	SS	df	MS	F
映画条件	176.36	1	176.36	16.35**
学年	108.50	1	108.50	10.06**
交互作用	7.06	1	7.06	0.65
誤差	1,575.68	146	10.79	
全体	1,867.60	149		

注 1．条件（映画）差の検定 $\begin{cases}中学F_0=12.48>F_{0.01}\\高校F_0=4.79>F_{0.05}\end{cases}$

2．学年差の検定 $\begin{cases}提示前F_0=9.68>F_{0.01}\\提示後F_0=1.07<F_{0.05}\end{cases}$

好意的態度の増加は，中学・高校ともに有意であるが中学と高校を比較すると，ソ連においては中学の増加がより大きいが，ハンガリーにおいては有意差が認められない。

次に長期間後の効果をみると，中学・高校ともハンガリーに対しては，短期間後に比べて好意的態度の減少が，ソ連に対しては，非好意的態度の増加がみられる。言いかえれば，ハンガリー国民の好悪に対する映画の効果は短期間後よりも減少するが，ソ連国民の好悪に対する効果は増大する。その差を要因分析によって検定すると，表13及び表14となる。すなわち有意差をもって映画の効果はすべてに認められるが，ただハンガリー国民への好意的態度の減少が，有意差をもって中学の方により著しいことが注目される。

以上の結果をまとめると，映画の国民好悪に及ぼす影響は，はじめに推定した方向において，短期間後にも長期間後にもあらわれる。表11～14に見る通り，映画条件と学年との交互作用は，長短両期間後ともに有意でないから，中学・高校間に相反する映画の効果はないわけであるが，程度の差がないわけではない。すなわちハンガリーに対しては長期間後に，中・高間の有意差が初めて出現するが，ソ連に対しては短期間後だけに中・高間の有意差がなくなっている。表10でもわかるように中学生の方が好悪の変動がやや大きいようである。それはなぜか。さきの感想調査及び知識の調査と結びつけて，その原因を推定すると，

(1) 映画の意図・内容を理解するための社会的基礎知識において，中学生が劣る。

(2) 従って中学生は製作者の宣伝的意図を正しく認知することがより少ない。

(3) 又映画から受ける感銘は，中学生の方がより具体的で，一般化の傾向も少ない。

前述のようにホブランド（1949）[7]は映画の態度への影響について，知能の高いものは合理的要因が，低いものは非合理的，情緒的要因がより多く働く傾向にあると指摘しているが，この場合高校生の方がより多く合理的要因によって左右されていると推定すること

表 13　提示前：長期間後―ハンガリー国民への好悪，要因分析

変動因	SS	df	MS	F
映画条件	30.09	1	30.09	5.07*
学　年	29.03	1	29.03	4.90*
交互作用	21.80	1	21.80	3.68
誤　差	866.46	146	5.93	
全　体	947.58	149		

注 1．条件（映画）差の検定 $\begin{cases} 中学F_0=0.06<F_{0.05} \\ 高校F_0=8.71>F_{0.01} \end{cases}$

2．学年差の検定 $\begin{cases} 提示前（なし） \\ 提示後F_0=8.12>F_{0.01} \end{cases}$

表 14　提示前：長期間後―ソ連国民への好悪，要因分析

変動因	SS	df	MS	F
映画条件	185.24	1	185.24	16.79**
学　年	118.08	1	118.08	10.71**
交互作用	5.58	1	5.58	0.51
誤　差	1,611.28	146	11.04	
全　体	1,920.18	149		

注 1．条件（映画）差の検定 $\begin{cases} 中学F_0=14.62>F_{0.01} \\ 高校F_0=5.41>F_{0.05} \end{cases}$

2．学年差の検定 $\begin{cases} 提示前F_0=9.46>F_{0.01} \\ 提示後F_0=10.64>F_{0.01} \end{cases}$

表 15　（検定は太線で分けられた2×2分割表による直接確率計算）

A．中　2

イ．ハンガリー（Ⅱ～Ⅰ）

好悪の差		―	0	＋	P
信頼感	思　う	3	2	10	0.18
	わからぬ	4	2	4	
	思わぬ	0	0	0	

ロ．ソ　連（Ⅱ～Ⅰ）

好悪の差		―	0	＋	P
信頼感	思　う	9	5	1	
	わからぬ	6	3	1	
	思わぬ	0	0	0	

ハ．ハンガリー（Ⅲ～Ⅰ）

好悪の差		―	0	＋	P
信頼感	思　う	7	1	7	
	わからぬ	6	1	3	
	思わぬ	0	0	0	

ニ．ソ　連（Ⅲ～Ⅰ）

好悪の差		―	0	＋	P
信頼感	思　う	9	6	0	
	わからぬ	4	2	4	
	思わぬ	0	0	0	

B．高　2

イ．ハンガリー（Ⅱ～Ⅰ）

好悪の差		—	0	＋	P
信頼感	思　う	2	1	15	0.01
	わからぬ	2	3	2	
	思わぬ	0	0	0	

ロ．ソ　連（Ⅱ～Ⅰ）

好悪の差		—	0	＋	P
信頼感	思　う	14	4	0	0.02
	わからぬ	2	4	1	
	思わぬ	0	0	0	

ハ．ハンガリー（Ⅲ～Ⅰ）

好悪の差		—	0	＋	P
信頼感	思　う	4	3	11	0.05
	わからぬ	4	2	1	
	思わぬ	0	0	0	

ニ．ソ　連（Ⅲ～Ⅰ）

好悪の差		—	0	＋	P
信頼感	思　う	13	4	1	0.06
	わからぬ	2	4	1	
	思わぬ	0	0	0	

も可能であろう。もしこの推定が正しいとすれば，この映画への生徒の信頼感と国民好悪の変動の間には，積極的な相関が高校生の方により大きくなければならない。この関係の吟味のために，a群について調査Dの問3とこの調査の国民好悪の変動（提示前後の差）との間の無相関検定をしてみると表15の通りである。すなわち高校では有意な相関があるが，中学ではそれがない。従ってはじめの推論は，正しかったと言えよう。

なお長期間後の効果が，ハンガリーにおいては減少，ソ連においては増加の傾向にあるのは，政治・経済・文化等の国際関係においてソ連の方が日本との関連度が高く，心理的距離が近いことによると思われる。ハンガリーにおいて，中学生の方に長期間後の減退率が大きいことも，この観点から，すなわち高校生よりも心理的距離が遠いという理由によって理解せられる。しかしこの推論の妥当性を検証するための資料はなお十分とはいえない。

（4）ハンガリー事件に関する意見の変化

ハンガリー事件における，ハンガリー国民やソ連，西欧諸国などの行動に関して，事実の解釈，総合あるいは意図・動機・理由に関する推論などを主とした意見に及ぼすこの映画の影響を確かめようとしたものが調査Bの問2である。この調査に当っては，応答者の考えを問うのであって，事実の証明を求めるのでないことを，教示において特に注意した。なお知識問題を後に配列したのは，「知識がないから答えられぬ」という拒否的な構えを被験者に作らせないための配慮からである。結果の処理に当っては，ソ連軍に抵抗するハンガリー市民たちの行動を，自分たちの生活を守り民族の自由と独立を確立するための正当な行動とし，それに対するソ連の武力干渉を不当とする映画の解釈に同調する方向の意見を正の反応として数えた。従ってハンガリー事件に関する客観的に妥当な解釈という立場から，意見の正負が決定されたものではない。この立場から15の意見項目（opinion items）を集計したものが表16である。提示前における中学と高校の平

表　16　ハンガリー事件に関する意見（総計点）

学年	群	a		b		(a＋b) 平均 (S.D.)	c		$c-\frac{1}{2}(a+b)$	交互作用 (I)
	調査時	平均	S.D.	平均	S.D.		平均	S.D.		
中2	提示前	3.16	2.44	3.20	2.67	3.18 (2.56)				
	短期間後	7.36	3.47	4.12	2.85		5.84	2.11	2.66	＋0.62
	長期間後	5.80	2.47	4.60	2.76		6.32	2.40	3.14	
高2	提示前	5.84	3.21	5.16	3.18	5.42 (3.16)				
	短期間後	8.68	3.48	4.84	3.42		7.88	2.89	2.38	＋0.70
	長期間後	7.32	3.33	5.36	2.56		7.00	3.50	1.50	

注．正反応は「たしかにそう思う」，「そう思う」などの程度の差に関係なく，すべて1点と数えてある。

均値を比較すると，高校の方が有意差（1％水準，$F_0=14.88$）をもって高くなっている。すなわち高校生の方が，この映画の意図する方向により同調的なプレディスポジションをもっていると解せられる。この傾向は高校生がソ連に対してより非好意的であったことと対応している。

表 17　提示前：短期間後―ハンガリー事件に関する意見，要因分析

変動因	SS	df	MS	F
映画条件	208.46	1	208.46	25.86**
学　年	160.00	1	160.00	19.85**
交互作用	27.46	1	27.46	3.41
誤　差	1,177.56	146	8.06	
全　体	1,573.48	149		

注 1．条件差の検定 $\begin{cases} 中学F_0=14.61>F_{0.01} \\ 高校F_0=12.61>F_{0.01} \end{cases}$

2．学年差の検定 $\begin{cases} 提示前F_0=15.57>F_{0.01} \\ 提示後F_0=\ 6.46>F_{0.05} \end{cases}$

表 18　提示前：長期間後―ハンガリー事件に関する意見，要因分析

変動因	SS	df	MS	F
映画条件	192.00	1	192.00	21.30**
学　年	107.20	1	107.20	11.88**
交互作用	7.06	1	7.06	0.78
誤　差	1,317.24	146	9.02	
全　体	1,623.50	149		

注 1．条件差の検定 $\begin{cases} 中学F_0=15.33>F_{0.01} \\ 高校F_0=\ 4.59>F_{0.05} \end{cases}$

2．学年差の検定 $\begin{cases} 提示前F_0=11.04>F_{0.01} \\ 提示後F_0=\ 0.50<F_{0.05} \end{cases}$

映画観覧後の変化をみると，長短両期間後とも，また中・高とも積極的な変化がある。そこで要因分析によって差の検定をすると，表17および表18となる。まず短期間後の効果をみると，中学・高校ともその差は有意である。学年差があるのは，提示前の差がそのまま移行したものと解せられる。長期間後の効果もやはり中学・高校ともに有意であるが，提示後における学年差は有意でない。

この調査はハンガリー事件について，種々の側面からの意見を集めたものであるから，以上の結果はさらに意見項目別に分析考察する必要がある。この意見項目を，ハンガリー人の立場から，西欧圏諸国の立場から及び共産圏諸国の立場からの三領域に分類して，項目毎の結果を示すと表19の通りである。

はじめに，(a_1+b_1) の正の反応率をみると，一般に低く，50％以上を示すのは高校の意見項目，(2)，(3)(6)，(12)の4個にすぎない。中学と高校の比較では意見項目(15)（有意差はないが）を除いてすべて高校の方が高く，意見項目(2)，(3)，(4)，(6)，(8)，(12)では有意差がある。すなわち高校生の方が，ハンガリー人の抵抗運動の動機として民族主義を肯定し，旧特権階級による失権回復の企図を否定すること多く，又西欧諸国の働きかけを否定して，ソ連が自己陣営防衛のためにのみ動いたという意見を肯定することが多いわけである。

短期間後の効果で，中・高とも同様に顕著な増加を見せたのは，生活改善と民族独立の要求をハンガリー抵抗運動の当事者の動機として肯定し，ハンガリーの社会主義者のためでなく，ソ連の帝国主義的支配欲をソ連の武力干渉の動機として肯定するような意見である。中・高相反する傾向をもったのは，映画条件と学年差に関する二次交互作用の検定によると，意見項目(15)と(7)である。高校生はハンガリーの社会主義者がソ連に武力介入を要請したという意見をより多く否定し，中学生は英仏がスエズ問題への世界の関心を転換するために策動したという意見に対してより多く否定的となった。提示前における正の反応率が低く，中・高間に有意差がなかったことを考えると，ここに現われた異方向への変化は，プレディスポジションによるというよりは社会的基礎知識の差によるものと推定される。

長期間後の効果で，新しく有意差をもって中高ともに増加をみせたのは，西欧資本主義諸国の煽動を，原因として認めない意見である。これは映画の宣伝的意図に対する抵抗が，時間の経過とともに減退したこと言いかえれば，情報源（news source）に関する知識の忘却が映画の内容の忘却よりも早いことをその原因とするのではなかろうか。5％水準以下の有意差をみとめ得なかったが，意見項目(2)の肯定についても同じことが言える。この事実についてはすでにホブランド（1949）[7]も指摘しているが，さらに検討を要する問題であろう。

なお以上のほかにも検討すべき事項は多いが，紙数もないので割愛する。

表 19　ハンガリー事件に関する意見(%)

	意見項目	群	a_1	b_1	a_1+b_1	c_2	$c_2-\frac{1}{2}(a_1+b_1)$	c_3	$c_3-\frac{1}{2}(a_1+b_1)$	交互作用(I)
ハンガリー人の立場から	(1) 生活改善の要求から (イ，ロ)	中2	32	32	32	72	40**	72	40**	−32
		高2	40	32	36	56	20△	48	12	+28
	(6) 民族独立の要求から (イ，ロ)	中2	36	40	38	64	26*	72	34**	+18
		高2	72	60	66	88	22△	72	6	−10
	(3) 旧貴族地主などの失権回復の要求から(ニ，ホ)	中2	28	16	22	48	26*	52	30**	−10
		高2	48	36	42	76	34*	56	14	−18
	(9) ポーランドの自由獲得にならって (イ，ロ)	中2	24	28	26	32	6	52	26*	+10
		高2	44	36	40	64	24*	48	8	−20
	(13) ユーゴースラビアのゆき方に期待をもって (イ，ロ)	中2	20	24	22	16	−6	24	2	+ 6
		高2	24	28	26	12	−14	12	−14	+22
	(14) ソ連の「雪どけ」政策に期待して (イ，ロ)	中2	12	16	14	20	6	28	14	− 2
		高2	28	20	24	8	−16	8	−16	+ 8
	(5) 国連の援助を期待して (ニ，ホ)	中2	16	8	12	40	28*	32	20△	− 6
		高2	20	16	18	32	14	32	14	−28
	(11) 西欧陣営の軍事援助を期待して (ニ，ホ)	中2	16	12	14	28	14	20	6	+26
		高2	16	20	18	60	42**	36	18△	+ 2
	(15) 社会主義者のソ連に対する武力介入の要請によって (ニ，ホ)	中2	12	20	16	16	0	12	−4	+32
		高2	4	20	12	60**	48**	20	8	−12
西欧諸国の立場から	(4) 西欧資本主義諸国のせん動によって (ニ，ホ)	中2	12	12	12	32	20△	60	48**	+ 3
		高2	36	24	30	48	18	56	26*	+18
	(8) 米国の援助によって (ニ，ホ)	中2	12	16	14	28	14	12	−2	+22
		高2	36	36	36	36	0	56	20△	+ 8
	(7) 英仏がスエズ問題への世界の関心をそらすために (ニ，ホ)	中2	24	20	22	60	38**	60	38**	+18
		高2	40	28	34	36	2	40	6	+38
共産圏諸国の立場から	(12) ソ連がハンガリーの社会主義者を援助するために (ニ，ホ)	中2	24	40	32	80	48**	48	16	− 4
		高2	68	52	60	88	28*	72	12	− 8
	(2) ソ連が社会主義陣営の防衛のために (イ，ロ)	中2	32	20	26	28	2	48	22△	−18
		高2	48	72	60	60	0	84	24△	+48
	(10) ソ連が帝国主義的支配権を確保するために (イ，ロ)	中2	24	24	24	44	20△	48	24*	+36
		高2	44	36	40	68	28*	64	24*	−40

注1. 表中(イ，ロ)，(ニ，ホ)とあるは，正の反応として採った選択肢。(イ，ロ)は「そう思う」，(ニ，ホ)は「そう思わない」ことを示している(付録参照)。

2. a_1，b_1は提示前のa群，b群を，c_2，c_3は短期間後及び長期間後のc群をあらわす。

（5） 人権意識における影響

この映画には，さきに述べたように，反ソ的な態度を強化しようとする意図に基づくと思われる偏見が包含されているとしても，少なくとも，民族の独立と自由が尊重されるべきこと，一国の利益のために他国の政治に武力干渉することの非難さるべきことを観客に訴えることはたしかである。その点から，映画を観覧した生徒の人権意識における向上が期待される。表20は，人権意識テストの Human と Consistency（一

表 20　人権意識における効果（粗点）

学年	種別	群 調査時	a 平均	a S.D.	b 平均	b S.D.	(a＋b) 平均 (S.D.)	c 平均	c S.D.	c−½(a＋b)	交互作用 (I)
中2	Human	提示前	76.20	12.80	77.80	11.35	77.00 (12.15)				
		短期間後	78.40	13.70	80.00	13.15		77.40	10.05	0.40	−0.40
		長期間後	78.80	12.05	79.80	12.55		79.00	9.65	2.00	
	Consis-tency	提示前	65.00	13.50	66.40	14.75	65.70 (15.10)				
		短期間後	68.20	16.62	71.20	15.04		66.20	12.10	0.50	−2.10
		長期間後	67.60	17.35	70.80	16.15		67.40	13.35	1.70	
高2	Human	提示前	80.40	14.80	86.40	7.45	83.40 (11.70)				
		短期間後	83.80	17.30	88.20	6.09		82.80	10.20	−0.60	2.20
		長期間後	84.80	15.50	86.60	7.68		83.00	10.85	−0.40	
	Consis-tency	提示前	74.00	18.70	79.00	11.15	76.50 (14.55)				
		短期間後	75.60	17.75	81.20	8.93		75.00	11.05	−1.50	0.90
		長期間後	76.40	19.86	76.00	11.74		73.60	14.75	−2.90	

表 21　Human—提示前：短期間後

変動因	SS	df	MS	F
映画条件	0.21	1	0.21	0.04
学年	62.60	1	62.60	11.82**
交互作用	0.99	1	0.99	0.19
誤差	774.10	146	5.29	
全体	837.90	149		

注．学年差の検定 $\begin{cases} \text{提示前} & F_0=9.26>F_{0.01} \\ \text{提示後} & F_0=2.76<F_{0.05} \end{cases}$

表 22　Consistency—提示前：短期間後

変動因	SS	df	MS	F
映画条件	2.29	1	2.29	0.28
学年	138.57	1	138.57	16.63**
交互作用	3.99	1	3.99	0.48
誤差	1,214.52	146	8.33	
全体	1,359.37	149		

注．学年差の検定 $\begin{cases} \text{提示前} F_0=14.00>F_{0.01} \\ \text{提示後} F_0=3.12<F_{0.05} \end{cases}$

表 23　Human—提示前：長期間後

変動因	SS	df	MS	F
映画条件	0.86	1	0.86	0.16
学年	50.58	1	50.58	9.44**
交互作用	4.20	1	4.20	0.78
誤差	783.44	146	5.36	
全体	839.08	149		

注．学年差の検定 $\begin{cases} \text{提示前} F_0=9.14>F_{0.01} \\ \text{提示後} F_0=1.08<F_{0.05} \end{cases}$

表 24　Consistency—提示前：長期間後

変動因	SS	df	MS	F
映画条件	1.92	1	1.92	0.24
学年	118.28	1	118.28	14.51**
交互作用	10.88	1	10.88	1.33
誤差	1,193.20	146	8.17	
全体	1,324.28	149		

注．学年差の検定 $\begin{cases} \text{提示前} F_0=14.47>F_{0.01} \\ \text{提示後} F_0=1.53<F_{0.05} \end{cases}$

貫性）を粗点によって集計比較したものである。短期間後でも長期間後でも，Human, Consistency ともに変化はわずかしかなく，高校ではかえって低下している。そこで要因分析によって差の検定をしてみると表21～24のようになる。

これによると，中学・高校とも映画観覧による効果は有意でない。ホブランド（1949）[7]は映画と直接的関連の少ない，一般的目標に関する意見項目では効果が少ないといっているが，ここではほとんど偶然の差というほかない。中学と高校の差は Human, Consistency とも提示前には有意であるが，長短両期間後とも有意差がない。しかしこの変化は映画観覧とは別の要因によるものではないかと思われる。

VI　結　　論

以上の結果を要約すると次の通りである。

(1) ここに用いた報道記録映画に対する生徒の信頼感はかなり強く，中学高校間に有意差はない。しかし高校生は中学生よりも製作者あるいは編集者の意図をより正しく認知し，又その内容をより一般化して受容する傾向がある。

(2) ハンガリー事件に関する社会的基礎知識は，有意差をもって高校生がまさる。しかし，映画観覧による知識の増加は，短・長両期間後ともに極めてわずかであった。ただし，これは検査問題の内容によってもちがってくる。

(3) 映画観覧後，短・長両期間とも，ハンガリー国民への好意的態度とソ連国民への非好意的態度の有意差をもった増加が認められた。高校生よりも中学生の方がやや動揺が大きい。それは高校生がより合理的要因に，中学生がより非合理的ないし情緒的要因によって動かされるためと推定される。

(4) 映画観覧後，中学高校生とも映画の強調する方向への意見の積極的な変化が認められた。この場合，基礎的知識の差異に基づくと考えられるところの，中・高異方向への変化を示す意見項目があった。又情報源への知識の忘却によると考えられるところの長期間後にだけ有意差をもつ変化を示す意見項目もあった。

(5) 映画の内容と具体的な連関の乏しい人権意識については，観覧後に有意な変化が認められなかった。

以上の研究において，なお十分に検討のつくせなかったいくつかの問題がある。又新たに派生してきた疑問もある。次にそのおもな問題点を二，三摘記しておく。

(1) この研究では，長期間後の効果を，短期間の効果を検査した群によって検査した。期間が長いので反復検査の効果（履歴効果）は少ないと思われるが，皆無とは言えない。又その間における他の教育的影響を除去する考慮もなければならない。しかしここでは，実施上の制約から，このための実験群及び統制群を設定することができなかった。この点が今後再検討を要する問題として残されている。

(2) 高校生が中学生よりも合理的に，映画を受容する態度をもっていることは，学校教育の効果にもよると考えられる。しかしそれでもなお，社会的態度における映画の影響が，中学生と大差ないほど高校生に大きいことは，映画鑑賞に関する指導の重要性を物語るものである。なお同じ学校組織の中で，同じ教師から教育されているのに，中学生より高校生の方が，ソ連に対して非好意的であったことは，態度形成の要因を追究する上に興味のある問題である。

(3) この実験で，社会科教育本来の目標と背馳するような偏見を生徒の中に生み出したすれば，それを是正すべき方法がさらに検討されるべきであろう。これは教育実践上の課題であるとともに，教育研究上の重要な問題でもあると信ずる。

引用文献

(1) PETERSON, R. C., and THURSTONE, L. L. : The effect of a motion picture film on children's attitudes toword Germans, J. educ. Psychol., 1932, 23, 241-246.

(2) PETERSON, R. C., and THURSTONE, L. L. : Motion pictures and the social attitudes of children. New York : Macmillan, 1933.

(3) ROSENTHAL, S. P. : Change of socio-economic attitudes under radical motion picture propaganda. Arch. Psychol. (New York), 1934, No. 166.

(4) WIESE, M. J., and COLE, S. G. : A study of childrens attitudes and the influence of a commercial motion picture. J. Psychol., 1946, 21. 151-171.

(5) ROSE, A. M. : Studies in reduction of prejudice, (2nd. Ed.), Chicago : Amer. Council Race Relat., 1948.

(6) ROSEN, I. C. : The effect of the motion picture "Gentlman's Agreement" on attitude toward Jews, J. Psychol., 1948, 26. 525-536.

(7) HOVLAND, C. I., LUMSDAINE, A A., and SHEFFIELD, F. D. : Experiments on mass

communication, Princeton : Princeton Univ. Press, 1949.

(8) 石黒彭二・織田長繁・都築　亨・中尾正三：社会科教育におけるマス・コミュニケーションの問題，第一報告—映画「しいのみ学園」における反応の研究—「名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要」第1集，1955，35-38.

(9) 国際教育研究会：国際理解テスト（〔Ⅱ〕人権意識テスト），東洋館出版社。

(10) SOLOMON, R. L. : An extension of control group design. Psychol. Bull, 1949, 46, 137-150.

第七報告　映画の鑑賞指導による社会的態度の変容について（Ⅲ）

Ⅰ　目　　的

この研究の目的は，さきの第三，第四報告[1]の場合と同様に，映画の社会的態度に及ぼす影響を，教師の鑑賞指導によってどの程度変化させることができるかを明らかにすることである。

第三報告では，映画「最後の橋」観覧による生徒への影響を，主題と同じ方向へ統制するための，講義法と討議法による教師の指導が，社会的態度の改善に効果的であることを明らかにした。とくに講義法は人権意識の向上において討議法よりも有効であった。第四報告では，映画「真昼の暗黒」観覧後，教師の講義による指導—人権意識を高め，裁判所に対する信頼感を回復するための—を加えた生徒と裁判所見学の経験をもつ生徒について，その効果を検討した。ところが実地見学群では，より妥当な受容の態度がみられたが，講義群では十分な効果が認められなかった。

以上二つの報告で，鑑賞指導のための講義法の効果が，くい違っているのは，前者が映画の影響に対する順方向の指導であり，後者が逆方向への指導であることにもよるが，又，映画の内容が多面的であって，その影響を一義的に決定しがたいこと，従ってまた，指導の効果を測定する方法も，多面的な変化を摘出できるほど十分なものでなかったことなどによるかもしれない。

そこでこの研究では，この点を明確にするために，映画の主張する方向が明瞭に把握され，しかも生徒の関心をひく国際問題に関係している題材を選んだ。ここで選んだ映画は，第六報告において検討した，ハンガリー事件に関する報道記録映画，すなわち「苦悶するハンガリー」と「この若き世代の怒り」とである。この映画は独立と自由を求めるハンガリー人への同情と，これに武力干渉するソ連への非難とをもたらそうとする意図の下に製作されたものと解せられる。従ってこの映画は観客に対して，ハンガリー国民に対する好意的態度と，ソ連国民に対する非好意的態度とを増加させ，又ハンガリー事件の意義と性格に対する解釈を，この映画の強調する方向に導くという効果を持つであろうと仮定することができる。

この仮定に基づいて，映画観覧後の生徒に対して，講義法による順逆両方向—影響の促進と阻止—への教師の指導が，いかなる効果を収めうるかを確かめること，これが，ここでとりあげようとしている問題である。そこでこの問題に対して次の作業仮説が立てられる。

〔作　業　仮　説〕

(1) 映画が真実を物語る証拠であることを強調し，それと矛盾する事実には触れず，さらに映画の主張を裏付ける他の事実をもって補強することによって，映画の提示する解釈への生徒の同調を強めることができる。

(2) 映画の製作意図を明示し，そこで除外されている事実への注意を喚起し，さらにそれと対立する主張を提示し，強調することによって，映画の生徒に対する影響を阻止することができる。

Ⅱ　方　　法

（1）実験の手続

中学1年の生徒60名を等質とみなされる20名ずつの3群に分けて，次の手続で実施する。

調査の期日はそれぞれ次の通り。

イ　事前調査（Ⅰ）3月15～16日（昭和34年）

ロ　映画提示，事後調査(D)，鑑賞指導　3月17日

ハ　事後調査（Ⅱ）3月18～19日

ニ　事後調査（Ⅲ）4月15～16日

映画の提示に際しての教示は，第六報告の場合と同様，社会科学習と結びつけて考えるよう指示したほかは，事前の解説など一切しない。映画観覧の学校の課業との関連についても第六報告の条件と同じ。

使用した調査も第六報告のものと同じであるが，調査Cについては，事前調査(Ⅰ)では人権意識テスト[2]ⅡA(C_1)だけを実施，事後調査(Ⅱ)以後はテストⅡB(C_2)を併用。ⅡAとⅡBを別の日に実施したことは言うま

でもない。

	実験群 (a)	実験群 (b)	統制群
事前調査(Ⅰ) (1～2日前)	調査 A, B, C_1	調査 A, B, C_1	調査 A, B, C_1
映画提示	提示	提示	提示
事後調査(直後)	調査 D	調査 D	調査 D
鑑賞指導 (調査D終了後)	促進的指導	阻止的指導	なし
事後調査(Ⅱ) (1～2日後)	調査 A, B, $C_{1,2}$	調査 A, B, $C_{1,2}$	調査 A, B, $C_{1,2}$
事後調査(Ⅲ) (30日後)	調査 A, B, $C_{1,2}$	調査 A, B, $C_{1,2}$	調査 A, B, $C_{1,2}$

(2) 提示材料

初めに「苦悶するハンガリー」(1巻，所要時間11分——US.5729)を，次いで「この若き世代の怒り」(2巻，所要時間20分——US.5805)を提示。

映画の内容については，第六報告でその梗概を掲げてあるので参照されたい。

(3) 被験者

名古屋大学教育部付属中学校生徒で，各群の新田中B式知能検査による偏差値は表1の通り。F検定によると各群間に有意差は認められない。

表 1

群	a	b	c
平均	62.85	62.55	63.60
S.D.	6.68	7.54	7.32

(4) 実験者

調査は3名の協力による。ただし鑑賞指導は次に示すような内容の録音テープにより，生徒への親密度がほぼ同じと考えられる石黒，都築の両名が，a，b両群に対して，別の教室で同時に行う。

(5) 鑑賞指導の内容

二種類の解説を，同一人が会話調で録音して使用した。解説所要時間は双方とも約15分。解説の要旨は次の通りである。

(a) 促進群に対する解説

1. 映画が描いている通り，ソ連は自国の共産主義を守るためにハンガリー国民の自由を奪い，労働を強制して彼等をみじめな生活に追いこんでしまった。
2. ソ連は民主主義を唱えながら，ハンガリーに対しては民主政治の手続を無視して，小数派の共産党に政権をとらせ，軍隊を駐留させて，この国を支配してきた。
3. 未来のために現在を犠牲にしてはならぬ。共産主義は高い理想を掲げているが現実は，国民の自由を束縛し，反対者の言い分を認めない。自国のため，共産党のためには，どんなひどいことでもやることを映画は如実に示している。
4. ハンガリーで，共産主義教育をうけた青年や軍隊までも，ソ連軍に抵抗したことは，ソ連軍の圧力に対する憎しみの強さを示すものである。西欧資本主義国のあてにならない援助だけを目当てにして，強力で勝てそうにもないソ連軍に生命がけで立向っていくはずがない。
5. ソ連は他国の中立，民族の独立を尊重するというが，共産圏諸国の自由と独立は尊重していない。ハンガリーを植民地ぐらいに考えて，そこでとれるボーキサイトやウラニウムを独占しようと望んでいるということも，この映画をみればほんとうらしく思われる。
6. 映画の中で言っていたと同じことが，ソ連国内にもある。そこでは国民の人権や，自由が全く認められず，秘密政治が横行し，反対者がまっ殺されたことが何度あったかしれない。これは新聞やラジオの報道で皆の知っている事実である。

(b) 阻止群に対する解説

1. 映画で描かれたハンガリー人の行動は胸をうつ。しかしこれはアメリカの手で作られ，USISによって無料で提供されたものである。誰のためにつくられたかに注意せよ。製作者に都合のよいことだけがうつされ，都合の悪いことが除かれてはいないか。
2. ソ連とその衛星国にも，不自由と共産党の独裁があった。これは，資本主義諸国の反対と，国内の旧地主，旧資本家の失権回復運動に対抗し，工業の発展をはかるためのやむをえない方法であった。
3. スターリン死後，ユーゴーや，ポーランドにおける行きすぎが，訂正された。いわゆる「雪どけ」である。ハンガリーで，それがつまづいたことについては，同じころに起ったスエズ問題と結びつけて考えねばならぬ。
4. これについてソ連側の言い分を聞こう。「西欧側はスエズ問題への世界の関心をそらせるために，さわぎたてた。武力援助すらしかねまじい調子でハンガリーに呼びかけた。旧地主や旧資本家が，これに応じて社会主義の廃止へと策動した。
5. ハンガリー人の中の社会主義者とソ連政府は，ハンガリーが古い制度にかえり，西欧の支配下になることをおそれ，武力でおさえることもやむをえないと考えたのである」と。
6. アメリカ側でも同様な例がある。中米のグァテマラで数年前革命政府ができたとき，米国はこれをソ連の策動だとした。間もなく，反革命軍が起り，革命政府を倒した。ソ連が「この革命政府を倒したのは米国だ」といっ

ていることも，ハンガリー事件と関連づけて考えるとよい。

Ⅲ 結果と考察

（1） 映画に対する生徒の反応

はじめに，結果の分析の前提として映画に対する感*想調査（D）とハンガリー事件に関連のある社会的基礎知識の調査（B）の結果をみよう。

まず，感想調査について，一番強い感銘を受けたところを問1の結果によってみると表2の通りである。

これによると，ハンガリー人の愛国心の強さ(イ)とソ連の圧迫のひどさ(ロ)が各群とも1，2位を占めており，全体の傾向も三群間に大きな差異がない。

表 2　　この映画で一番強く感じたところ%

群	a		b		c	
イ．ハンガリー人の愛国心の強さ	50	65	40	60	50	70
ヘ．ソ連軍に対するハンガリー人の抵抗のはげしさ	15		20		20	
ハ．ハンガリー人の悲惨な生活	5	25	0	30	5	25
ホ．弱い民族や国のみじめさ	5		10		10	
チ．自由を求めて他国にひなんする人々のあわれさ	15		20		10	
ニ．秘密警察などを使う政府のひれつさ	20	65	5	45	5	60
ロ．ソ連のハンガリー人に対する圧迫のひどいこと	35		30		40	
ト．共産主義のおそろしさ	10		10		15	
リ．その他	0		0		0	
（2つ以上）	(30)		(20)		(25)	
合　　計	155		135		155	

注　1人で2つ以上記入したものがあるため，百分率の合計は100より多くなっている。

次にこの映画の内容をどれほど信頼するかを，問3によってみると，表3の通りである。

表 3　　映画の報道内容を真実と思うか（%）

	a	b	c
思　う	85	75	80
わからない	15	25	20
思わない	0	0	0

すなわち，真実と思わないものは1人もなく，各群ともほぼ似た傾向を示している。もちろん有意差は認められない。

次に映画の製作者を，生徒がどれほど理解しているかを，問2についてみよう。表4はその結果をまとめたものであるが，各群ともほぼ似た傾向であって，「ハンガリー人が写し，アメリカで編集した」と正しく答え得たものは1人だけである。製作者の認知が製作者の意図の理解に反映していると仮定するならば，アメリカ人を製作者として答えたものを含めても，この映画のかくされた意図をよく理解しているものは，各群ともわずかしかいないと考えてもよかろう。

表 4　　この映画の製作者（%）

群	a		b		c	
ハンガリー人	45		50		60	
アメリカ，又はアメリカ人	5	20	20	20	15	15
ソ連のざんこくさを訴える人	10		0		0	
ハンガリー人が写しアメリカで作る	5		0		0	
平和を願う人々	5	35	0	30	0	25
国　連	5		10		5	
わからない，記入なし	25		20		20	

（2） ハンガリー事件に関する知識とその変化

ハンガリー事件について，新聞やラジオなどを通じて，事前にどれほど知っているか。調査B—問1(1)によってみると，「みたり聞いたりしたことがある」と答えたものは，阻止群15%，促進・統制両群各20%で，わずかしかない。それではハンガリー事件に関連し，それを理解するに必要な社会的基礎知識をどれほ

表 5　社会的知識

調査時	Ⅰ		Ⅱ～Ⅰ		Ⅲ～Ⅰ		Ⅲ～Ⅱ	
群	平均	S.D.	平均	S.D.	平均	S.D.	平均	S.D.
促進（a）	17.50	4.51	0.20	3.30	0.35	3.26	0.15	3.05
阻止（b）	17.25	4.36	0.60	3.13	1.20	2.81	0.60	3.11
統制（c）	18.00	4.31	0.60	2.46	0.85	3.07	0.25	3.25

注　調査時Ⅰは事前調査，Ⅱは短期間後の，Ⅲは長期間後の調査を示す。以下同じ。

どもっているか，又それが映画観覧後どう変化したかを，第六報告の場合と同様に調査Bの知識問題30項目についてみると，表5の通りである。

各調査時とも各群間に多少の差異はみられるが，いずれも有意差はない。また映画観覧によって特に知識が増加したとも言いきれないようである。しかし全体的にみれば，各群とも60%前後の平均正答率であるから，ここでとりあげた問題の理解に対して障害を来たすことは，あまりないとみてよかろう。

そこで次にこのような生徒が，社会的態度においてどう変化したかをみよう。*

*(3)　ソ連とハンガリーに対する国民好悪の変化

この映画の観覧によって，生徒のハンガリー国民に対する好意的態度と，ソ連国民に対する非好意的態度が強められるものと推定される。従って作業仮説によれば，鑑賞指導の結果，促進群（a）と阻止群（b）及び統制群（c）の間には次の関係がなり立つはずである。すなわちハンガリー国民に対する好意的態度の増加量も，ソ連国民に対する非好意的態度の増加量もともにa＞c＞bとなるはずである。調査Aにおける実際の結果をみると表6の通りである。

表 6　諸国民に対する好悪

国民名	調査時	Ⅰ		Ⅱ～Ⅰ			Ⅲ～Ⅰ			Ⅲ～Ⅱ		
	群	平均	S.D.	平均	S.D.	差の検定	平均	S.D.	差の検定	平均	S.D.	差の検定
ハンガリー	促進(a)	4.20	2.40	** 3.60	3.41		** 2.55	3.46		* −1.05	2.18	
	阻止(b)	4.25	1.92	** 2.55	1.94	△	* 1.75	2.84		−0.80	2.13	
	統制(c)	4.00	1.73	** 4.05	3.04		** 2.65	2.92		* −1.40	2.76	
ソ連	促進(a)	4.60	3.75	** −3.45	3.61		** −3.80	3.54	*	−0.35	0.91	△
	阻止(b)	4.70	3.96	** −2.55	3.34		** −1.85	2.20		0.70	2.35	
	統制(c)	5.15	3.96	** −3.05	2.82		** −2.55	2.82		0.50	1.63	

注　1.　**は1%水準で，*は5%水準で，有意差のあることを示す。また△は10%水準で差のあることをあらわす。以下これに準ずる。

2.　平均の欄における**，*，△は，各群内における増加量又は減少量の有意差検定の結果を示す。

観覧前におけるソ連，ハンガリー両国民に対する態度は，各群間に有意差を認めない。ところでソ連国民に対する非好意的態度の増加は，短期間後（Ⅱ～Ⅰ）においても，長期間後（Ⅲ～Ⅰ）においても，予期した通りの結果である。ただし，三群間で有意差のみられるのは，Ⅲ～Ⅰにおける促進群と阻止群の間においてだけである。被験者数が少ないので，参考までに，有意水準を10%まで下げると，Ⅲ～Ⅱの促進群と阻止群の差もこれに該当することになる。なお注意すべきことは，阻止群においても，ソ連国民に対する非好意的態度の増加が，短・長両期間後とも有意差をもって認められることである。すなわちここで行った程度な鑑賞指導では，映画の影響を完全に阻止することはできないことを示すと考えられる。

次にハンガリー国民に対する好意的態度の増加量をみると，各群とも短・長両期間後において，有意であるが，各群相互間の関係は予期したところと異なり，c＞a＞b（いずれも有意差はない）の関係となった。なおⅢ～Ⅱの減少量は，促進・統制両群においてのみ有意（5%水準）を認めうるが，これは，短期間後に

おける好意的態度の増加が，両群において特に著しかったためとも解せられる。なおⅡ～Ⅰの増加量における分散が，阻止群だけ他と有意差（5％水準）をもって小さくなっていることを考えあわせると，促進・統制両群はほぼ同じ傾向であるが，阻止群だけはやや違った心的機制が働いていたと推定することが許されるであろう。いずれにしても，ハンガリーについて，三群間の差異がそれほど明瞭に現われなかった主たる原因は，鑑賞指導の内容が，ソ連に対するほど明確に区別されていなかったことにあると考えられる。*

*(4) ハンガリー事件に関する意見の変化

作業仮説に従えば，ソ連の武力干渉を不当とし，ハンガリー市民のこれに対する抵抗を正当とする映画の解釈と主張への同調傾向の強さは，鑑賞指導後三群間においてa＞c＞bの関係となるはずである。調査Bの問2における15の意見項目（opinion items）において，映画の主張に同調する方向の意見を正反応として集計すると，表7の通りである。

表 7　ハンガリー事件に関する意見（総計点）

調査時	Ⅰ		Ⅱ～Ⅰ			Ⅲ～Ⅰ			Ⅲ～Ⅱ		
群	平均	S.D.	平均	S.D.	差の検定	平均	S.D.	差の検定	平均	S.D.	差の検定
促進（a）	2.15	3.62	**5.15	3.02	*	**4.65	2.51	**	−0.50	2.00	
阻止（b）	2.25	2.83	**2.55	3.40		△1.40	3.03		*−1.15	1.96	
統制（c）	2.10	3.21	**4.45	3.97		**3.30	3.44	△	△−1.15	2.54	

注　正反応は「たしかにそう思う」「そう思う」などの程度の差に関係なく，すべて1点として数えてある。

事前調査の成績では，三群間に有意差が認められない。短期間後では，三群ともに有意差をもった増加が，長期間後では促進・統制両群に有意差をもった増加が認められる。又Ⅲ～Ⅱでは各群とも減少が認められるが，阻止群のみが有意差を示している。同調的意見の増加における三群間の関係は，予期した通りの傾向を示している。ただしⅡ～Ⅰのb，c間には有意差がなく，Ⅲ～Ⅰのb，c間の差も10％水準であるにすぎない。又a，c間にはⅡ～ⅠにもⅢ～Ⅰにも有意差が認められない。従って確実とは言えないが，総合的にみれば大体仮説を支持する傾向にあり，その傾向はとくに長期間後に顕著であると言えよう。

次に意見項目別に，この結果を検討してみよう。表8はその結果である。

表 8　ハンガリー事件に関する意見（％）

	意見項目	調査時	Ⅰ	Ⅱ～Ⅰ		Ⅲ～Ⅰ		Ⅲ～Ⅱ	
		群	％	％	差の検定	％	差の検定	％	差の検定
ハンガリー人の立場から	(1) 生活改善の要求から（イ，ロ）	促進（a）	20	40		40		0	
		阻止（b）	25	35		25		−10	
		統制（c）	15	35		50		15	
	(6) 民族独立の要求から（イ，ロ）	促進（a）	5	60	*	55		−15	
		阻止（b）	30	25		25		0	
		統制（c）	25	40		35		− 5	
	(3) 旧貴族，地主などの失権回復の要求から（ニ，ホ）	促進（a）	5	50	*	50	*	0	
		阻止（b）	20	10		− 5	*	−15	
		統制（c）	15	40		10		−30	
	(9) ポーランドの自由獲得にならって（イ，ロ）	促進（a）	15	35		10		−25	
		阻止（b）	10	30		30		0	
		統制（c）	10	20		15		− 5	

	意見項目	調査時	Ⅰ	Ⅱ～Ⅰ		Ⅲ～Ⅰ		Ⅲ～Ⅱ	
		群	%	%	差の検定	%	差の検定	%	差の検定
ハンガリー人の立場から	(13) ユーゴースラビアのゆき方に期待をもって（イ，ロ）	促進（a）	15	5		0		－5	
		阻止（b）	5	10		5		－5	
		統制（c）	10	0		10		10	
	(14) ソ連の「雪どけ」政策に期待して（イ，ロ）	促進（a）	5	30		20		－10	
		阻止（b）	10	0		5		5	
		統制（c）	10	10		10		0	
	(5) 国連の援助を期待して（ニ，ホ）	促進（a）	10	50		40		－10	
		阻止（b）	10	25		10		－15	
		統制（c）	15	20		20		0	
	(11) 西欧陣営の軍事援助を期待して（ニ，ホ）	促進（a）	15	35		25		－10	
		阻止（b）	5	10		5		－5	
		統制（c）	5	35		25		－10	
	(15) 社会主義者のソ連に対する武力介入の要請によって（ニ，ホ）	促進（a）	20	15		20		5	
		阻止（b）	10	10		－5		－15	
		統制（c）	5	30		10		－20	
西欧圏諸国の立場から	(4) 西欧資本主義諸国のせん動によって（ニ，ホ）	促進（a）	15	30	*	25		－5	
		阻止（b）	20	－5	*	0		5	
		統制（c）	20	35		25		－10	
	(8) 米国の援助によって（ニ，ホ）	促進（a）	20	20		25		5	
		阻止（b）	5	30		30		0	
		統制（c）	15	5		5		0	
	(7) 英仏がスエズ問題への世界の関心をそらすために（ニ，ホ）	促進（a）	25	30	*	45	*	15	
		阻止（b）	20	－10	*	－5		5	
		統制（c）	30	30		15		－15	
共産圏諸国の立場から	(12) ソ連がハンガリーの社会主義者を援助するために（ニ，ホ）	促進（a）	20	60	*	50		－10	
		阻止（b）	30	20	**	－5		－25	
		統制（c）	10	60		40		－20	
	(2) ソ連が社会主義陣営の防衛のために（ニ，ホ）	促進（a）	15	25		20		－5	
		阻止（b）	20	40		15		－25	
		統制（c）	15	15		20		5	
	(10) ソ連が帝国主義的支配権を確保するために（イ，ロ）	促進（a）	5	35		45		10	
		阻止（b）	10	15	*	10		－5	
		統制（c）	10	55		40		－15	

注　表中（イ，ロ），（ニ，ホ）とあるは，正反応として採った選択肢。（イ，ロ）は「そう思う」，（ニ，ホ）は「そう思わない」ことを示している。（付録参照）

これをみると，a，b間又はb，c間に有意差のある意見項目は，すべて観賞指導において強調された内容である。すなわち項目(3)は解説（b）4で，項目(4)は解説（a）の4と解説（b）4，6で，項目(6)は解説（a）4，5で，項目(7)は解説（b）3，4で，項目(10)は解説(a）5と解説(b）2，6で，又項目(12)は解説（a）4，と解説（b）5でそれぞれ，直接間接に触れている。しかし解説の中で触れていながら，有意差をみなかった項目もある。(14)，(15)などはそれである。これらは解説がよく理解されないとか，強く印象づけられないとか，あるいはa，b両群の反対方向への方向づけが不明瞭であるとかに原因があるように思われる。これ以上の細かな分析は紙数の都合で差控えるが，とにかく解説の効果はたしかにあったと認めてよかろう。この場合，どのような内容の解説が，又どんな方法による解説が効果的であるかを追求することは興味があるが，これは今後の問題として，ここでは触れないことにする。*

*(5) 人権意識における影響

第六報告でもみたように，一般的目標に関する意見とみられる人権意識では，映画の効果は現われにくいと考えられるが，はたしてどうか。この場合，ソ連の行動を正当化するような説得が，武力の使用や弱小民族の圧迫，あるいは人権無視の行動を是認する方向への促進を伴うおそれがあると仮定するならば，世界人権宣言の精神に即して，作成されたこの人権意識テストの成績は，阻止群における効果が最も減殺されると考えることもできる。すなわちその増加量は，やはりa＞c＞bという関係になるだろう。しかしこの場合の結果の解釈は，国民好悪やハンガリー事件に関する意見の場合と異なり，一義的には処理しつくせないものがあるように思われる。それはともかく，その結果をみよう。

表9によれば，事前調査では Human ⅡA（この場合は，ⅡAのみについて比較）でも，意見の一貫性（Consistency）でも，三群間に有意差はない。

表 9　人権意識における効果（粗点）

	調査時	Ⅰ		Ⅱ～Ⅰ			Ⅲ～Ⅰ			Ⅲ～Ⅱ		
	群	平均	S.D.	平均	S.D.	差の検定	平均	S.D.	差の検定	平均	S.D.	差の検定
Human ⅡA	促進(a)	36.10	5.16	1.00	3.16		**2.60	3.66		1.60	2.52	
	阻止(b)	36.20	4.82	1.20	5.30		△2.90	6.91		△1.70	4.26	
	統制(c)	34.70	6.14	2.40	4.36		*3.50	5.46		1.10	2.82	
Consistency	促進(a)	59.75	13.30	0.90	6.18		**7.00	8.10		**6.10	8.68	
	阻止(b)	58.75	11.95	*4.50	8.96	*	△5.75	12.05		1.25	9.34	
	統制(c)	58.25	15.70	**5.50	7.30		**6.30	9.54		0.80	10.19	

注　Consistency のⅠは事前調査(Ⅰ)のテストⅡAと事後調査(Ⅱ)のテストⅡBにより，Ⅲは事後調査(Ⅲ)のⅡA，ⅡBから算出してある。

次に HumanⅡAの値についてみよう。統制群だけが短期間後にも長期間後にも有意差をもって向上しているが，促進群では長期間後に有意差をもって，又阻止群はわずかに10%水準で，長期間後に向上を示している。促進と阻止共に，鑑賞指導がかえって人権意識における映画の効果を減殺する働きをもっていたのではないかと考えられる。

次に一貫性を Constency の値によってみると，Ⅱ～Ⅰにおいて，促進群だけ有意な増加が認められない。しかしⅢ～Ⅰでは大きな進歩をみせているので，長期間後三群間の差はほとんどなくなる。これは促進群における鑑賞指導が，生徒の意識に一時的な動揺を与える要因を含んでいたのではないかと推定されるが，それは又，HumanⅡA における変動とも関係がありそうに思われる。

なお短期間後と長期間後の Human の成績についてはⅡAとⅡBを合計したものが使用できるが，表10にみるようにⅢ～Ⅱで各群間に有意差は認められない。

表10　人権意識 Human における効果（粗点）

調査時	Ⅱ		Ⅲ	
群	平均	S.D.	平均	S.D.
促進（a）	74.00	10.20	78.00	11.07
阻止（b）	75.50	7.83	77.00	9.95
統制（c）	76.00	11.23	75.00	11.00

Ⅳ　結　　論

以上の結果を総合すると，初めに立てられた作業仮説は，ここに得られた資料によって一応支持されると考えてよかろう。しかし細部については，それと整合しない事実や関連性の不明確な事実もいくつか見出だされた。次にその要点をまとめてみよう。

(1) 国民好悪については，鑑賞指導における方向づけが直接的で明瞭である場合（ソ連）には，促進と阻止の影響がかなり明確にとらえられるが，その方向づけが，多面的で複雑な場合（ハンガリー）には，必ずしも明確でない。

なおこの実験条件の下では，阻止的指導も映画の効果を減殺するだけで，完全には阻止することができなかった。ここでは約15分間の指導であったが，指導条件（内容と方法）の変化によって，さらに検討を要する問題であろう。

(2) ハンガリー事件に対する意見については，鑑賞指導における促進と阻止の効果が，かなり明瞭に認められた。その差は特に長期間後に著しい。

促進又は阻止のための指導内容（解説）と，個々の意見項目への反応における変化との間の関連性をみると，その対応がかなり明確に指摘された。しかしその指導の効果が顕著に現われない意見項目もある。意見項目間におけるこのような差異がどのような要因によるものであるかを検討することは，鑑賞指導を効果的にする上からも大切な問題であるように思われる。

(3) 人権意識については，内容がかなり一般的であるため，鑑賞指導の効果を一義的には限定しがたいが促進又は阻止の働きかけが，映画の人権意識に対する影響を，一時的に妨害する何らかの要因となっているように思われる。しかしこの要因は一時的なもので，長期間後には消滅するらしく，やがて指導を受けないものと同じ位まで映画の効果が回復する。

しかしこの点については，条件分析においてなお十分つくしえないところもあるので，第三，第四報告との関連において，あらためて検討を加えたいと考えている。

引用文献

(1) 石黒鈔二・織田長繁・中尾正三，社会科教育におけるマス・コミュニケーションの問題，第三報告・第四報告，「名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要」第3集，1957，124～131

(2) 国際教育研究会，国際理解テスト（〔Ⅱ〕人権意識テスト），東洋館出版社

付　録　　質　　問　　紙

調 査 A　諸国民に対する態度

調査日時：昭和 34 年　　月　　日　　第　　時限　中・高　　学年　　組　　番　氏名

つぎに世界の国々の名が二つずつ並べてあります。あなたはそのうちのどちらの国の国民が一そう好きですか。政治経済文化や社会生活など，いろいろの方面からその国民の好ききらいが考えられるかもしれませんが，この場合はそれらを全体として考えてきめて下さい。二つとも好きな場合でも，二つともきらいな場合でも，その中でより一そう好きな方をきめて下さい。そして好ましいとして選んだ国名の右側のらんに○印をつけなさい。

これは試験ではありません。もちろん学校の成績に加えるものでもありませんから思ったままを答えて下さい。

	国名	すき○		国名	すき○		国名	すき○		国名	すき○
1	イギリス		18	ハンガリー		35	インド		52	インドネシア	
	イラン			ソ連			ソ連			イタリア	
2	ハンガリー		19	イタリア		36	インド		53	インドネシア	
	インド			ハンガリー			イタリア			米国	

調 査 B

調査日時：昭和 34 年　　月　　日　　第　　時限　中・高　　学年　　組　　番　氏名

これは1956年の10月から11月にかけて起ったハンガリー事件について，研究の参考にするための調査です。試験ではありませんが，まじめに思ったままを書いて下さい。

1. あなたは以前に新聞・雑誌・ラジオなどでハンガリー事件について読んだり聞いたりしたことがありますか

(1) イ．ある　　ロ．ない

(2) 読んだことのある人はそれをどこでいつごろ読んだか（又は聞いたか）書きなさい。

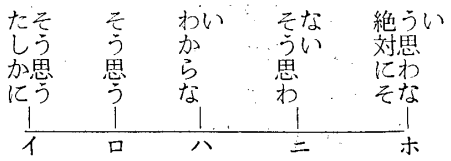
ラジオ・新聞又は雑誌の名			
読んだ時期			

(3) それはどんな事件でしたか。かんたんに答えなさい。

2. ハンガリー事件について，次にのべてあるいろいろな考え方に対して，あなたはどのように考えますか。それを5段階尺度で答えて下さい。たとえば「女子は将来家庭の主婦となるべきものだから，よい妻となり母となるように教育すべきである」という問に対して「たしかにそう思う」人はイに○をつける。それぞれの問題を上の方法で自分の思う程度を尺度の上にあらわして下さい。なおその理由を下の空欄に書き入れなさい。

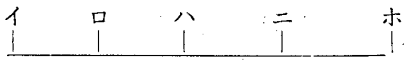
(1) ハンガリー事件は労働者や青年たちが自分たちの生活を向上させるために賃金の値上げや生活の改善秘密警察の廃止などを強く要求したために起ったのである。

その理由：



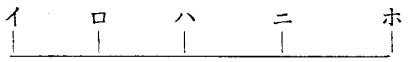
(2) ソ連がハンガリー事件に武力で干渉したのは，社会主義の陣営がくずれるのを防ぐためには武力を用いるほかに方法がないと判断したからである。

その理由：



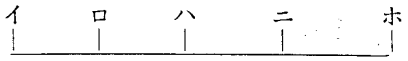
(3) ハンガリーのもとの支配階級であった旧貴族地主僧侶たちが，かっての支配権を回復しようとたくらんだために，ハンガリー事件は起った。

その理由：



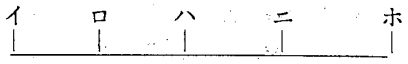
(4) ハンガリー事件は，ソ連に反抗するように，西欧の資本主義諸国がかげて煽動（そそのかし）したために起ったものである。

その理由は：



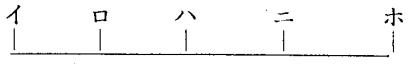
(5) ハンガリー事件は，ハンガリー国民の自由を求める運動に，国際連合が援助を与えてくれるであろうと期待して起されたものである。

その理由：



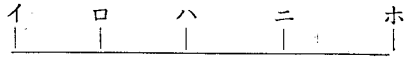
(6) ハンガリーで暴動が起ったのは，10年にわたるソ連軍の支配に反抗する，ハンガリー国民の民族主義のあらわれである。

その理由：



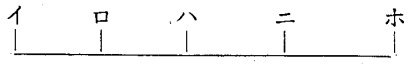
(7) 当時，スエズ問題で英仏両国が世界各国から強く非難されていたので，その関心を他にそらせるために，ハンガリー事件に介入して，わざと問題を大きくしたのである。

その理由：



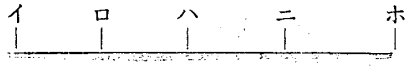
(8) ハンガリーで暴動が起ったのは，ハンガリー人の自由と完全独立を求める気持を，米国が理解し援助したからである。

その理由：



(9) 当時ポーランドで，ソ連に対して自由を求める運動が成功したのに刺戟されて，ハンガリー国民の間にこの運動が起ったのである。

その理由；



(10) ハンガリー事件は，ソ連がその赤色帝国主義の支配権を，暴力をもってしても確保しようとしたために起ったものである。
その理由：

イ　ロ　ハ　ニ　ホ

(11) ハンガリー国民は，自由を求める運動に西欧陣営が軍事的な援助をあたえてくれるであろうと期待して，この行動をおこしたものである。
その理由：

イ　ロ　ハ　ニ　ホ

(12) ソ連がハンガリー事件に武力で干渉したのは，社会主義を守ろうとするハンガリー人たちを助けようとしたからである。
その理由：

イ　ロ　ハ　ニ　ホ

(13) この事件は，ハンガリーがユーゴースラビアと隣りあっているので，民族の自主性をもった社会主義（チトー式）のゆき方に希望をもち又援助を期待できると考えて起されたものである。
その理由：

イ　ロ　ハ　ニ　ホ

(14) フルシチョフが指導権を握ってから，ソ連の今までのゆき方に対する批判が起ったので，ハンガリーの人々はこのような行き方が許されるだろうと考えたのである。
その理由：

イ　ロ　ハ　ニ　ホ

(15) ハンガリー事件は，自分たちの権力を守ろうとするハンガリーの社会主義者たちが，ソ連に頼って武力介入を要請したために大きくなったのである。
其の理由：

イ　ロ　ハ　ニ　ホ

3．次のいくつかの問に答えなさい。

(1) 次の文は資本主義経済の特色をあらわしたものか，社会主義経済の特色をあらわしたものか（　）内に前者は「資」後者は「社」どちらにも共通なものは「共」とかきなさい。

（　）a　私有財産制度が認められ，生産手段（資源や機械設備など）の私有が許される。

（　）b　一定の基準（ノルマ）を設けて，すべての人が労働に応じた分配をうけられるしくみになっている。

（　）c　経済活動について，個人の自由は大はばに認められる。

（　）d　豊富な原料と機械化された生産設備によって，大量生産がなされる。

（　）e　経済活動の原則として営利主義が認められ，個人による利潤をできるだけ大きくしようと努める。

（　）f　資源生産設備原料など，生産に必要な一切のものが社会全体の所有とされる。

（　）g　デフレーションやインフレーションなど景気の変動がはげしい。

（　）h　国全体の生産や流通・消費を，一定の計画に従って国家が管理する。

(2) 次の□内に，適当な語を下からえらんで入れなさい。

国際連合は［イ］年につくられ，その本部は［ロ］にある。

国際連合の諸機関の中で，特に国際間の戦争を防止して，平和を維持することを目的とするのが［ハ］である。

イ…A　1919，B　1940，C　1945，D　1948

ロ…A　ジュネーヴ，B　パリ，C　ロンドン，D　ニューヨーク

ハ…A　経済社会理事会，B　安全保障理事会，C　信託統治理事会，D　世界保健機関

答	
イ	
ロ	
ハ	

(3) 次のA群の人名と，最も密接な関係のあるものをB群から一つずつ求め，その記号を答のらんに書きなさい。同じ記号を二度使ってもよい。

A 群	答		B 群
a．ゴムルカ	a		イ．ソ　連
b．ナセル	b		ロ．インド
c．ネール	c		ハ．イギリス
d．カダル	d		ニ．ポーランド
e．スターリン	e		ホ．エジプト
f．チャーチル	f		ヘ．ハンガリー
g．アイゼンハウアー	g		ト．米　国

(4) 次にあげた左の語と最も関係の深いものを，右の文の中からえらんで記号で答えなさい。

a　ポーランド
b　ドイツ
c　ハンガリー
d　ギリシャ
e　ユーゴスラビア

イ．第一次大戦後独立した。第二次大戦中はチトーの指導下にドイツに抵抗した。

ロ．何度か他の国に分割されほろぼされたことがある。

ハ．古くから文化の栄えた国である。長くトルコの支配下にあったが，19世紀に独立国となった。

ニ．アジア人の国である。第一次大戦までは，オーストリア帝国に属してヨーロッパに重きをなした。

ホ．第二次世界大戦に枢軸国として戦って敗れ，社会主義国と自由主義国によって東西に分割占領された。

答	a	b	c	d	e

(5) 次の国のうち，社会主義国家群に属するものは「社」自由主義国家群に属するものには「自」とかきなさい。

西ドイツ（　）　　ルーマニア（　）

ハンガリー（　）　　トルコ（　）

(6) 最近，ハンガリー事件に関係したナジが，裁判の結果死刑になりました。

イ　それはいつごろか（○印）

A　昭和32年6月　　B　昭和32年11月

C　昭和33年6月　　D　昭和33年11月

ロ　彼はその当時どんな役割をもっていたか。

調査 D

昭和日時　昭和34年3月　日第　時限

中高　学年　組　番　氏名

いま見たハンガリー事件に関する映画（苦悶するハンガリー，この若き世代の怒り）について，研究の参考にしたいので，感じたままを正直に書いて下さい。

1．あなたは，いま見た映画について，どんなところを一番つよく感じましたか。次の中で一番近い感じのものに○をつけなさい。

イ．ハンガリー人の愛国心の強さ
ロ．ソ連のハンガリー人に対する圧迫のひどいこと
ハ．ハンガリー人の悲惨な生活
ニ．租密警察などを使う政府のひれつさ
ホ．弱い民族や国のみじめさ
ヘ．ソ連軍に対するハンガリー市民の抵抗のはげしさ
ト．共産主義のおそろしさ
チ．自由を求めて他国に避難する人々のあわれさ
リ．その他（具体的に書きなさい）

2．あなたは，この映画がだれによってどういう目的で作られたものだと思いますか。

3．この映画で報告されていることはほんとうだと思いますか。（次のどこかに○をつけなさい）

思う――――わからない――――思わない

又その理由をくわしく説明しなさい。

4．あの映画を全体としてどう思いましたか。何でもよいからくわしく書いて下さい。